

文化

12

立川と語ろう 立川に生きよう
December 2007
écoutez bien Vol.26 No.277



Villain

で、いたずらし

合格だけが
目的じゃない。
パワーも個性も
引き出してくれる！

写真：五来孝平

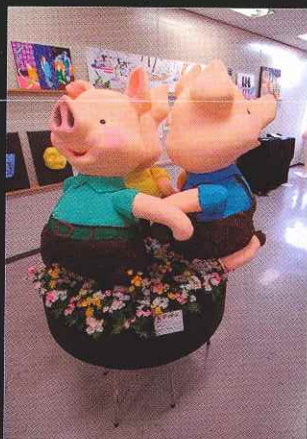
こ こ が タ チ カ ワ !
こ こ も 立 川 !

⑤

立川美術学院 (錦町)



奇怪な者



ポークダンス

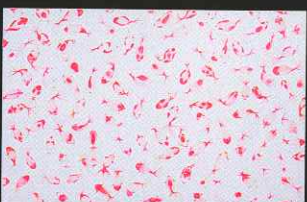


うさランド

袋ちゃん



日常のリズム



金魚



夢から覚めないで



根性



食べごろ



Cafe TACHIBIへようこそ



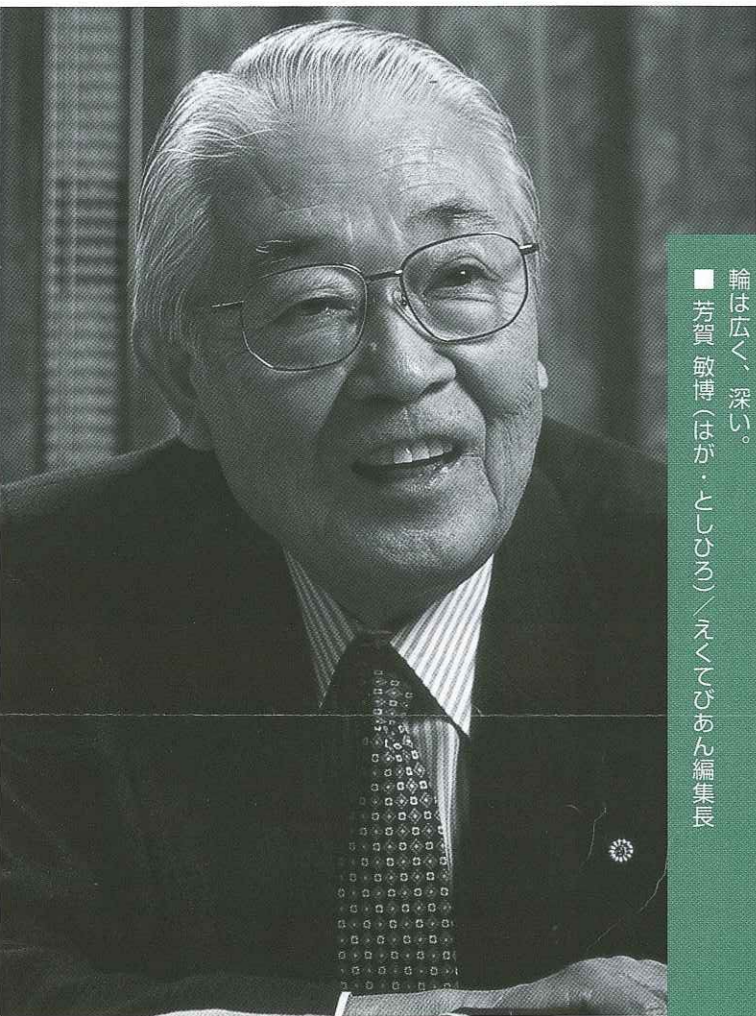
色から街へそして空に

予備校と聞くと、なんとなく沈鬱なモワ〜とした受験臭が漂ってくる。その雰囲気は全く無いかから、つい最近まで「立美」が予備校だとは知らなかった。すでに創立40年の歴史をもつ。南武線の線路脇に、鼻水を垂らし白目をむいて「エビチリ」の香りを嗅いでいる女の子の大きな自画像があったのを覚えている人も多いだろう。「朝からあんな変な絵を見せられたのではたまらない」とクレームが学校に入ったそうだが、なんとあの自画像はその後、パリのカルティエ現代美術財団に購入されたのだからすごい！実はこの華々しい経歴も、予備校なのに毎年行われる作品展「立美祭」で頂点の立美大賞を受賞したところに始まっている。

その「立美祭」に行ってみた。とにかくおもしろい！準備期間はたったの10日。全ての作品にパワーが炸裂していた。来場者が投票して各賞が決まる。今年の立美大賞は「Villain」。時計のブランドを立ち上げたという設定で、ブランド名からそのロゴデザイン、ポスター、時計の文字盤、パンフレット、ディスプレイまで4人の女の子のオリジナル。立美祭当日は販売プロモーションのパフォーマンス付き。トータルな企画が来場者の心をつかんだ。

立美の講師陣は層が厚い。縦にはベテランから中堅、若手とアーティストを揃え、横には油絵や日本画はもちろん、建築や映像・先端芸術も取り入れ、そしてここが予備校——学科や小論文まで見てくれる。過去にはあの村上隆も講師だった。卒業生には社会に出てから大活躍している人も多い。フェアレ内、立川 TM ビル西南にある「17才」という作品。これも立美卒業生 袴田京太郎さんの作品。立美に行くと、明日のアートが見えてくるかも……。

そろばんは世界に誇る日本文化です



そろばんを指導して半世紀余 岩田 幸雄さん

■ 岩田 幸雄（いわた ゆきお）／昭和七（一九三二）年石川県生まれ。五歳から立川で育つ。昭和二十九年富士見町にそろばん塾を開き、以来五十余年。奥棟と二人三脚でそろばんを指導した生徒は数知れず。立川商工会議所の珠算能力検定や、小学校でのそろばん授業などにも長年貢献している。平成十六年開かれた「わかさ塾」五十周年の祝賀会には、多くの教え子が集まった。そろばんによって培われた人の輪は広く、深い。

■ 芳賀 敏博（はが としひろ）／えくてびあん編集長

於：富士見町 わかさ塾 写真：五来孝平

芳賀 最初に白状しますが、僕は小さい頃からそろばんやお習字がてんでだめで、全然ものになりませんでした。しかし電卓やコンピューターが幅をきかせるこの時代に、またそろばんが見直されているそうですね。

岩田 昔から日本の教育の基本は読み、書き、算盤（そろばん）と言われますが、日本人の計数能力の高さはそろばんによるところが大きいと思います。海外に行くとき実感しますが、買物をして店員の計算が遅い。お釣りを商品に足し算していくのでいらいらします。お釣りは補数計算といいますが、そろばんをやると非常にイメージしやすいです。特にそろばんを習わなくても、日本ではそういう考え方が自然に親から子に伝えられている

んでしょうね。そろばんは実用的な面では役割を終えたかもしれませんが、教育面で数感覚を理解するのに有効な教具として、また見直されてきているんだと思います。

芳賀 そろばんは日本独自のものというわけではないんでしょう？

岩田 現在日本で使われているそろばんの原型は、450年くらい前に中国から伝わったと言われています。それは上に玉が二つ、下に玉が五つあるもので、中国ではこれがまだ使われています。日本ではある時期から上の玉を一つにした。いわゆる五つ玉で昭和初期まで使われました。下の玉をさらに減らして四つにしたのが現在のそろばんです。

芳賀 玉の数が減ったというのはなぜ？

岩田 上玉二つのそろばんは10進法や位どりが目で見てすぐ理解できますが、速く計算するには向きません。四つ玉は練り上がりを理解したりするのに少し訓練が必要ですが最小限の玉の動きで速算向きです。日本では速く計算をするために改良が加えられてきたといえるでしょうね。玉がスムーズに動く繊細で緻密な造りも日本ならではの。中国、韓国、台湾などでは現在の日本式そろばんが普及してきています。やはり速算ができるからなのでしょう。

芳賀 そろばんは文化だと……。

岩田 計算に限らず、例えば比喩的に「二一五」とか言うでしょ。

芳賀 すみません。「にいちてんさくのご」って何ですか？

岩田 ご存知ないですか？ われわれの年代だとたまに使うんですが、割り算の九九の1÷2のことです。割り算の九九というのはそろばんに玉を置いてみると理解しやすくて、1を2で割ると一つ下のけたの天（上玉）が5。つまり0.5で割り切れるという意味です。それで数だけでなく物事がすっきりと解決したりすると「二一五（にいちてんさくのご）」。

そういう最近ではそろばんを教えている人でもあまり使いませんね。

芳賀 う〜ん、奥深い。割り算の九九なんて学校で習いませんし、知りませんでした。

岩田 江戸時代までは掛け算の九九と同じように使ったようだし、われわれがそろばんを習い始めた頃はまず覚えさせられました。明治5年に学制が布かれ計算は洋算（西欧式算数）でやるというので一時そろばんが教育から外されました。1年ほどでそろばん教育は復活しますが、割り算の九九は学校では教えないことになったようです。古い計算法とし

て捨てられたのですが「三一三十一（さんいちさんじゅうのいち）」は1÷3は上のけたが3で余りが1、さらに割り算を繰り返すと0.333333……と無限に割り切れないことがすぐ分かります。よく見ると非常に合理的にできているんです。

芳賀 僕のように文章を扱う仕事をしていても、最近はコンピューターのキーボードを叩くわけですが、一応指は使っているはずなのに手で書いていた頃比べると字をどんどん忘れるんです。実際に手を動かしてプロセスを確認していくという過程が人間にとって大事なんじゃないかと思います。

岩田 そろばんでは、数字を見たり読み上げる数字を聞き、指で玉を動かして、結果を数字として紙に書く。この一連の動作が人間の計数能力を育てるようです。計算を玉の動きのイメージとしてとらえるんです。上達してくると、実際にそろばんの玉を動かさなくても頭の中で玉の動きをイメージできるようになります。暗算ですね。この時、脳の中でも右脳を使っているのだそうで、そろばん上級者になると数字を書きながら次の計算したり、人と話をしながら計算をしたり、同時に二つのことが行われている。これは脳生理学者の方が実験していて確かなようです。

芳賀 そうそう。テレビでそろばんの名人の方がものすごい計算をあっという間にすると見ると、こういう人の頭の中はどうなってるんだろうと感心します。

岩田 現在の名人は大学生ですが、そろばんには検定1級の上に、さらに初段から10段までの段があって、10段を集めた大会で優勝した人が名人になります。検定1級の問題が満点で初段。段の試験では10けたの計算60問を10分で解かないといけませんから、1問10秒で解いて書かないといけません。暗算で

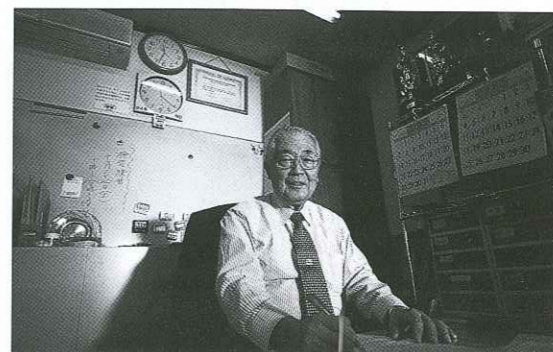
ないと追いつかないスピードです。スピードという点では電卓検定の上級者も速いですが、電卓上級者はほとんど、そろばんの上級者でもあるんです。最近話題のインド式計算の本を見ていたら、やはりそろばんの考え方が取り入れられていました。位どりや概数計算など、そろばんはイメージの道具なんです。

芳賀 そうですか……僕も小さい頃に岩田先生のような方に出会っていたら、そろばんが好きになっていたかも知れない（笑）。

岩田 いやいや（笑）。でも、どんな上級者名人も最初は初心者です。1足す1、から玉を動かして行く。私どもの塾では幼稚園の年長さんのから受け入れています。子どもは無限の能力を持っていると本当に思いますね。若い生徒たちからエネルギーをもらっている部分もあるんでしょうね。不思議なもので、そろばんというのは長く通う生徒が多いんです。小学校低学年から大学までずっと来ている子もいます。15年も一緒にいると自分の子どものように思えるんですよ。小さい子は膝の中に入りますし……。

芳賀 そういう家庭的なところが、習い事のいいところでもありますね。

岩田 最近は子どもだけでなく、高齢者のグループでそろばんをやるという方も増えてきました。指を使い、頭の中でイメージを動かすのは老化防止にもいいんです。われわれの仲間には百歳で元気に指導をされている方もいます。わたしも、がんばらなくては。



幸	とんかつ・割烹 かつ亭	幸町4-59-3 535-4611
	ドイツ製法ハム・ソーセージ ゼーホフ工房	幸町4-59-4 535-5009
町	和洋菓子 たちばな	幸町5-2-16 537-0347
	BSタイヤショップ 佐藤商会	幸町5-10-2 537-0912
	古楽の小屋 ロバハウス	幸町6-22-32 536-7266
	めがね・とけい補聴器 カワハラ	錦町1-1-25 525-4427
錦	鳥料理 くし秀	錦町1-2-3 522-7692
	御菓子司 やな瀬	錦町1-3-12 522-3969
	宮地楽器 MUSIC JOY 立川南	錦町1-3-21 526-1779
	中国料理 五十番	錦町1-4-5 522-7472
	手づくり味噌の材料専門店 北島こうじ店	錦町1-4-28 524-3190
錦	new gyoza1059 餃子天国	錦町1-5-6-1F 526-2283
	イタリアンダイニング asa	錦町1-5-6-1F 529-5668
町	ワインバー バルアラディ	錦町1-5-6-1F 523-3917
	テーブルウェア H.works	錦町1-5-6-2F 521-2721
	CAFE SOMMEILLER	錦町1-5-6 527-1440
	手うち蕎麦 なかさと	錦町1-5-22-1F 524-5758
	中国気功整体院 立川院	錦町1-5-22-1F 529-1088
	焼きたてパンの店 ヴァイツェンブート	錦町1-6-19 527-2176
	日本クッキングスクール	錦町1-7-31 522-3440

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります

今月は 幸町・錦町のお店です。

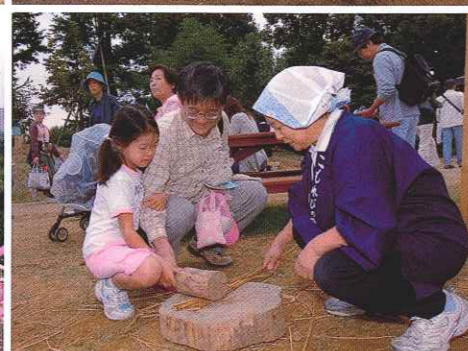
幸	ザ・クレストホテル立川	錦町1-12-1 521-1111
	美容室 アリス	錦町1-15-21 525-1100
	パンと洋菓子 うちのやブルマン	錦町1-18-7 524-9280
	そば処 そば菜	錦町1-20-15 522-7558
	Cafe Cima Coppi	錦町1-20-15 533-5266
	画廊 無門庵ギャラリー	錦町1-24-26 529-2323
	駄菓子・ファンシー むぎぼたけ	錦町2-0-1 526-0210
	美容室 FALCO	錦町2-1-10 528-2389
錦	諸官公庁御用達・日用雑貨 池田屋	錦町2-1-10 522-3731
	N HAIR WORLD	錦町2-1-18-1F 523-5336
	しゃぶしゃぶ・鍋料理 しゃぶりん	錦町2-1-33-3F 527-2228
町	スペイン料理 TAPAS	錦町2-2-29 529-0733
	Bakery Cafe Crown	錦町2-4-2 526-2226
	三田花店本店	錦町2-5-23 524-4187
	いわさき痛みの整骨院	錦町2-5-26 529-5123
	(有)朝日屋酒店	錦町2-6-12 525-6333
	にしやま薬局	錦町2-7-8 525-9212
	パスタの店 パセリ	錦町3-1-21 525-8486
	アミューたちかわ	錦町3-3-20 526-1311
	多摩信用金庫 錦町支店	錦町3-6-9 528-0511

われらの村が、 みんなの村に

国営昭和記念公園 こもれびの里

国営昭和記念公園の「こもれびの里」づくりに取り組む市民ボランティアの活動を「われらの村暦」として『えくてびあん』誌上でご紹介したのは2005年から06年にかけて。その里がこの秋、いよいよ一般公開された。都市の中にある公園に武蔵野の景観と昭和30年代の農村風景を再現しようと、手に鋤を持ち汗を流して開墾した「われらの村」が、多くの人を訪れる「みんなの村」になる。

写真：五来孝平



10月、里は秋の稔りていっぱい。田んぼの稲刈りが半分終わり、畑には陸稲（おかぼ）、落花生、サツマイモ、里芋、秋蕎麦……。水車小屋では水車が粉を挽き、小さいながら果樹園や茶畑もある。立派な作業小屋も。整備が始まった5年前には、盛り土に雑草が生える荒地だったのが信じられない。

大きな施設や土木工事は国営公園の〈官〉が、実際に土地を耕し作物を育てる農業活動は一般公募で集まった「こもれびの里クラブ」の市民ボランティアたちが。いま流行の〈官民協働〉だが、計画段階から市民ボランティアが参加して進められてきたのがこの「村」のユニークなところ。

何もなかったところから、地元有志の指導を受けながら畑をつくり、農業を使わずできるだけ昭和30年代当時の技術で農作物を作る。武蔵野の農村に伝えられてきた年中行事や伝統的食べもの、細工物など「暮らしの智慧」の伝承にも力を入れてきた。

一般公開初日の10月13日は薄曇りの秋空。里には江戸時代末から砂川五番に伝わってきた高さ16mの大轆のりが、見事な龍の飾り物とともに40年ぶりに勇姿を現した。開園式などの

セレモニーが行われ、テープカットとともに待っていた人たちが一斉に入る。

13、14両日は立川や周辺の民俗芸能も披露され、昔懐かしい遊び、縁日の露店を思い出す水飴やヨーヨー釣り、餅つき体験、農家のおやつだった焼き餅体験など、盛りだくさんの「秋祭り」で賑わった。この後ももうどんづくり体験、サツマイモ・落花生掘り、炭焼き体験、ソバづくり体験などのイベントが続き、11月23日～25日には「収穫祭」。

体験イベントに参加するには事前予約が必要だが、農村の雰囲気を味わうならいつでも訪れることができる。ボランティアの活動日なら農作業をする「村人」の姿があるはず。作業小屋を訪ねれば、里でとれた大麦を使った自家製麦茶などを振る舞ってもらえるかもしれない。

風景のかなめというべき農家の母屋や土蔵は、これから古い建物を移築しなければならない。果樹園の柿や栗の木、周囲に植えた雑木の苗が一人前に育つには10年以上かかる。息長く根気づよく。都市の中なのにずっと昔からあるなつかしい風景のように溶け込む日が、やがて来るだろう。

立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ

**多摩てばこ
ネット**

http://www.tamatebako-net.ne.jp/

多摩てばこネット編集工房
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武蔵ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄
真如苑提供番組組じょうらくがじょう

スカイパーフェクTV 216ch
マイ・テレビ 11ch

放送時間については番組表をご確認ください。

立川に育てられて七十一年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

雑誌・書籍・地図・政府刊行物・教科書・文房具・事務機

オリオン書房

■ルミネ店
(立川ルミネ7F) TEL 042-527-2311

■ルテ店
(パークアベニュー3F) TEL 042-522-1231

■サザン店
(グランデュオ下サザン2F) TEL 042-525-3111

■アレア店
(アレアア2・3F) TEL 042-521-2211

■立川北口店
(第一デパート3F) TEL 042-523-3311

http://www.orionshobo.com

大廣社は今、「知的集約」型企業を実践しています。

伝達を使命とする情報産業の一翼を担う大廣社は、新しい時代の新しい表現を責任を持って拓くために、クリエイティブから最終製品にいたるまでの一貫体制を構築しています。

先進のシステムと最新技術との融合

株式会社 大廣社
〒190-0022 東京都立川市曙町5-17-13
tel 042-527-1311 fax 042-527-1949
E-mail info@daikousya.jp
http://www.daikousya.jp/index.html

えくてびあん流

**葉っぱのひとり言に
耳を澄ます**

群馬直美さん
『街路樹 葉っぱの詩』

例年になく紅葉が遅くなった今年も、そろそろ落葉の季節。名だたる山や渓谷に行かなくても、近所の道を歩いていると、さまざまな街路樹がそれぞれの季節を奏でている。

立川在住で、自称「日本でただ一人の葉画家」群馬直美さんが描いた細密な葉っぱの絵と、これまた味わい深い文で構成した『街路樹 葉っぱの詩』(世界文化社)がこのほど発刊された。

『木の葉の美術館』『木の葉の宝石箱』に続く、絵と文のシリーズの完結編。樹木たちの責任ではないけれど、人工と権力臭のする街路樹というテーマを、なぜか棟方志功を思わせる靴屋のおじさんの「マサイの人たちの裸足歩行を取り入れた靴だよ」という言葉に買ってしまった靴を履いて、自らの足で歩いて会いにいった木や草や葉っぱたち。

わが立川を含め、東京を中心に「駅から徒歩108分」などという行程の通り、テクテクと歩いて描いた画が素敵で、文も読んでいるうちに軽さの底にふかふかとした大地の含蓄があることに気がつく。絵も文も、時に健脚が必要なのだ。



この人この店 53

**ステーキ & 欧風料理
QUATTRO**

岩田 美佐子さん

チーズフォンデュといえば、このお店! 柴崎町のクワトロです。ランチでいただくと、とってもお得。トロ〜リチーズにフランスパン。くせのない旨味をからめていただければ、いくらでも入ってしまうのも魅力です。オーナーの岩田一憲さんが若かりし頃、大阪の万博はスイス館で食べたチーズフォンデュ。世の中にこんなおいしいものがあつたのか! の思いが今に至ります。柴崎町にお店を出して16年。ゆったりとした店内は、隣のテーブルを気にせず会話のできる落ち着いた雰囲気。鍋をつつく感覚で、みんなでチーズフォンデュを囲めば外の寒さも忘れそう。開店当初から、ランチの顔は奥さまの美佐子さん。「夜は絵を描いたり、お花のアレンジをしたり」とお仕事以外でも活躍中。手作りリースやお花が飾られて、しっとりとしたお店作りは美佐子さんの雰囲気なんだと納得しました。

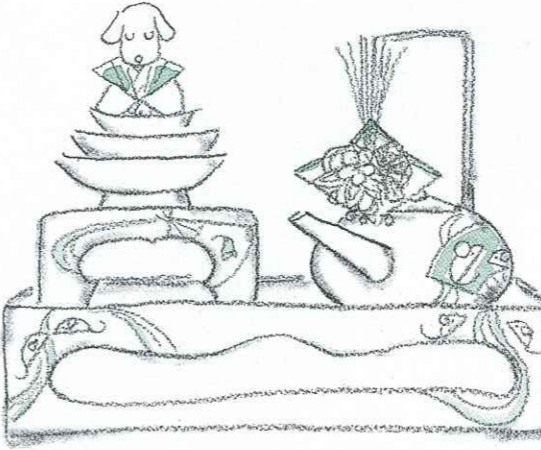
〒190-0023 立川市柴崎町2-3-3
TEL 042-528-2983
営業時間 11:30~15:30
17:00~23:00
定休日 月曜日



写真撮影: 五来孝平

立川のお作法
中野 豪清
第5回

**お正月を
迎える**



挿画: 綾 幸子

木枯らしが吹くと、木々はすっかり冬の装いになる。街は歳末の気ぜわしさに包まれる。大掃除が行われ、冬至の柚子湯に浴せばクリスマス。すっかり日本に定着したクリスマスには、キリスト教徒でなくてもケーキを買い、家族や友達とパーティーをして楽しむ。

門松が立って年神様のご降臨下さる場所が定まる。邪鬼これより入るべからずのメ縄飾りが玄関に。尊く清浄でめでたい神饌用の鏡餅が、神棚、仏壇、床の間、火と水の神のおわす台所に供えられると迎春準備も万全。「もういくつ寝るとお正月」の童歌が耳底に聞こえてくる。年末恒例のNHK紅白歌合戦も終わりに近づくと、除夜の鐘が、来る年の平和を願い、また百八つの煩惱をきよめよと鳴り響く。年改まれば神社、仏閣への初詣。毎年初詣の一番乗りをして、ご利益のあるように神様に顔を覚えてもらうのだという、冗談と笑えない話もある。

正月三日間は、主婦の休日。主人が年男になり、若水を汲み雑煮を作り神様にお供えをする。それから家族揃って、新年の挨拶の「おめでとう」を言う。お屠蘇を頂き、雑煮や、おせち料理をいただく。年始回りは正月二日から。日頃お世話になっている大事な方々へ、年始のご挨拶にうかがう。玄関先で挨拶をして帰るのが礼儀だが、やむなく座敷に通された場合は、頃合いを見て辞去する。長居は禁物。訪問される側は、年賀の場合、家の中に招き入れるのが礼儀だ。お屠蘇、おせち料理を皿に取って出し、お酒、雑煮等を振る舞う。

お屠蘇は人の生気を蘇生させる薬として、1100年前、弘仁年間の嵯峨天皇の時代に、和唐使の蘇明という博士が漢方薬

の屠蘇自散を天皇に献上した。天皇は絹の袋に入れた屠蘇自散を酒に浸して正月三カ日飲まれたことから、国民もこれに倣って飲むようになったのが起因と言われている。お屠蘇を頂くに、お父さんは主客で大きな盃。お母さんは次客で中の盃、子供は末客で小さい盃で頂く。来客には、必ず大きな盃を勧めます。

<屠蘇の勧め方>

- ① 主客の前に屠蘇台を持ってくる。
- ② 手前向きの銚子の向きを客側に向ける。
- ③ 盃の向きも客側に向ける。
- ④ 草礼をする。
- ⑤ 屠蘇台より盃ごと盃台をとり自分の右膝横に置く。
- ⑥ 大、中、小の盃を屠蘇台に置き、大のみ残り中小の盃は、盃台に戻す。
- ⑦ 屠蘇台の大きな盃を客に渡し、銚子を持ち、鼠尾、馬尾、鼠尾と屠蘇を注ぐ(鼠尾は少し、馬尾は鼠尾より多め)。
- ⑧ 客が屠蘇を飲み終わり、盃を屠蘇台に置いたら、右膝横の盃台をそのう上に隠すように置き、次客の前に移動する。
- ⑨ 次客に草礼する。
- ⑩ ⑤⑥⑦の順序で屠蘇を勧めれば良いが、⑤の順序の時に盃台を取ると、盃台の下に大の盃がある。それは右膝横に盃台を置いてから、屠蘇台の手前左角に寄せる。
- ⑪ 末客まで勧め終わったら、屠蘇台ごと持ってお下げする。盃を洗いきれいにしてから、元の所に戻す。

今では屠蘇台を見ることがささなくなった。時代が変わっても、民俗の良いしきたりは残してほしいと思う。

表紙の人

杉戸清樹さん(緑町)

先月号「ここがタチカワ!ここも立川」でご紹介した国立国語研究所の所長がこの方。専門分野は社会言語学、言語行動論……と聞くと、まさにアカデミックそのものの世界であるが、例えば「最近変な敬語が多いような気がする」といったことを真面目に調べて、生きものとしての日本語(国語)がどうなのかを考える、というと案外身近なところで親しく感じられる。言葉・文章を扱う仕事のはしくれにいる「えくてびあん」としても、ちょっと怖いような、頼りにしたいような存在なのだ。

国立国語研究所で 写真: 細江英公

かたこと

早いもので、今年も最終月の「えくてびあん」をお届けいたします▼異常気象といえます。春以降は長雨、連日の猛暑日に夏台風、中越沖地震もあり、だらだら暑い秋一時期の挨拶に困る一年でした▼天地の動向を知り作物を育てる。農業は昔も今も難しく、そして人の命を育むわざです▼国営昭和記念公園に昭和30年代の農村風景をつくりだす。「こもれびの里」が5年にわたる市民ボランティアの活動により、いよいよ一般公開されました▼広大な国営公園の中で最後まで残った未公開ゾーン。かつての旧陸軍飛行場、米軍基地がようやく本来の平和な武蔵野の姿を取り戻したというべきでしょうか▼対談は富士見町で50年以上そとろばん塾を続けて来られた岩田幸雄さん。パチパチと玉をはじくそとろばんは老いも若きも無限の能力を育てる力を秘めているようです▼「ここがタチカワ!……」は美術家の卵たちが集まる「立美」をご紹介します。そう、かれら若きアーティストたちにも無限の可能性があり▼昔の人は歳の改まることに古いものの死と新たな再生を観望しました。明年は十二支の改まる子歳。えくてびあんも心新たに良い誌面をお届けしたいと念じます。皆さま、良いお年をお迎えください。(芳)

スタッフ

編集 大久保清志/清水恵美子/中薫子
デザイン 池田隆男(WATER DESIGN ASSOCIATES)
AMNET design factory
写真 五来孝平

えくてびあん 12月号

第26巻 通巻277号
平成19年12月1日発行
発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
編集人 芳賀敏博
発行人 加賀悦也
印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。

もみの木

この日ばかりはもみの木も、きれいなドレスを身にまとう。暗闇にみみずくが待つのはイブの鐘。星の煌めく静かな夜に、森がささげる平和の祈り。

輝きのメルヘン

ともやす
ジュエリーコレクションから

5

植物

写真：五来孝平

花

冷たい風もなんのその。ガラスで覆われた明るい温室。緑は太く大きく育ち、思い思いの花を咲かせる。水と光と愛情で育った花は美しい。

